慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「朝比奈宮の縁起」の成立
Sub Title	
Author	徳竹, 由明(Tokutake, Yoshiaki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1999
Jtitle	三田國文 No.30 (1999. 9) ,p.31- 38
JaLC DOI	10.14991/002.19990900-0031
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19990900-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「朝比奈宮の縁起」の成立

徳竹　由明

一、はじめに

鎌倉幕府初期の有力御家人である和田小太郎義盛の三男、朝比奈三郎義秀は、一[1]説には母を巴御前とされ、強力無双の武将として名高く、門[2]破り、地獄破り、曾我五郎との草摺引き等々、伝承の世界でも大いに活躍している。さてこの朝比奈義秀は、『吾[3]妻鏡』建保元年五月三日条によれば、父の和田義盛を始め和田氏一族が滅亡したいわゆる和田合戦の際に大いに奮戦した後、父とは運命を共にせず、

……朝夷名三郎義秀、三十八、併数率等出海濱、棹船赴安房国。其勢五百騎、船六艘云々……

と戦場を離脱し海路逃亡した。なお『吾[4]妻鏡』は安房へ逃亡後の義秀の消息を語っておらず、史実としての朝比奈義秀のその後の足跡は辿るべくもないが、伝承の世界では、朝比奈義秀は安住の地を求めて木[5]曽、熊野、讃岐等々様々な場所へと至った事になっている。そうした伝承の一つとして朝比奈義秀が高[6]麗に渡航したとする伝承がある。この伝承を書き記した文献の中、私が確認しうる限り最古の物と思われる『本[7]朝神社考』の当該箇所を、以下に引用する。

朝夷名

和田義盛、故木曽義仲の妾巴といふ女を娶りて義秀を生む。建保元年、和田氏誅に伏す。義秀亡れて房州に走る。時に年二十八。或はいふ、義秀房州より高麗国の赴くと。対馬の人余に謂ひて曰く、高麗釜山海に朝夷名の祠有り。浦人時々之を祭ると。

さて、朝比奈義秀の高麗渡航伝承に関しては詳[8]細は別稿にて論じたいが、この伝承は本来は和田氏の滅亡に付随する伝承であるにもかかわらず、やはり鎌倉幕府初期の有力御家人である畠山庄司次郎重忠、六郎重保父子の滅亡を物語る御伽草子の『はたけ山』の中にも挿入されている。徳[9]田和夫氏によって「朝比奈宮の縁起」と命名された箇所がそれである。以下、当論考では、瑣末な問題ではあるが「朝比奈宮の縁起」がどのようにして成立したか、つまり本来和田氏滅亡に付随する伝承である朝比奈義秀の高麗渡航伝承が、どのようにして畠山氏の滅亡を物語る御伽草子『はたけ山』の中に組み込まれ得たのかを論じてみたい。

二、「朝比奈宮の縁起」について

畠山庄司次郎重忠、六郎重保父子の滅亡を物語る御伽草子『はたけ山』は、室町時代末期の成立とされ、現在、内閣文庫[10]及び神宮文庫に江戸時代中期頃書写と思われる伝本が一本ずつ伝わっている。[11]両伝本に本文の大きな相違は見られない。おおよその内容は、前半で誤って将軍源頼朝を殺害してしまったことで罪を問われた畠山重保が由比ヶ浜で幕府軍に追討を受け、人磔を打つ等の奮戦の後竜宮へ逃避したことが語られ、後半で追討軍を秩父に迎え討った畠山重忠の奮戦と自害とが語られるといったものである。「朝比奈宮の縁起」は、その前半部分で畠山重保の追討が二代将軍頼家によって決定され討手の一人として朝比奈義秀が選ばれたとする場面に続いて挿入されている。そのおおよその内容は、前半で母の巴によって朝比奈義秀が実は畠山重忠の子であって自身が追討すべき対象である畠山重保が実の兄であることを明かされ、後半で兄を討たなければならない運命をはかなんで朝比奈義秀が三浦を出奔し、やがて高麗に渡って門破り等でその強力を顕わして右大臣にまで出世し、朝比奈宮として今の世まで日本に向かって祭られているとするものである。さて朝比奈義秀の高麗渡航伝承がどのようにして畠山氏滅亡の物語に取り込まれ得たのかと言うことは、「朝比奈宮の縁起」の前半部分の内容から鑑みるに、つまりはどのようにして実際には和田義盛の子息である朝比奈義秀を物語の内部で畠山重忠の子息へと改変し得たのかということになろう。そこでまず、「爰にひとつの物語有、」で始まる地の文と「其時、母のともへ、あさいなを一ま所に近付、ひそかに語けるハ、」で始まる巴の発話部分からなり、またその両者がほぼ同内容を繰り返し語りながら微妙に相違している点もあるのでやや理解しにくくはあるが、「朝比奈宮の縁起」（以下「縁起」と略称する。）の前半部分の内容を以下に整理・要約する。

1、木曽殿の身内に葵、ともへという二人の女武者がいた。
2、当時、ともへは一千人力の強者であるとともに、十八歳で並び無き美人であった。
3、あわつが原で討死する前に、木曽殿は「国に下りつつ、ひそかに申しとどけよ。」と申付けて、ともへを戦場より落ち延びさせた。
4、ただ一騎となったともへは、武蔵国の住人、おんたの八郎もろしけの首をねじ切って討ち取り、大津の方へ退こうとした。
5、これを見た重忠は、ともへに組んで生け捕り、その後ともへを寵愛した。
6、重忠は都より帰国の際三浦に立ち寄り、ともへを三浦大助に参らせた。大助はともへを寵愛しやがてあさいなの三郎が生まれた。大助は我が子と思っていたが、実は重忠の子であった。

おおよそこの様になるわけであるが、一見して『平家物語』諸本などに見られる巴の伝承を下敷きにして朝比奈義秀を畠山重忠の子であるとしていることが想定されるであろう。

三、「朝比奈宮の縁起」の成立背景

それでは『平家物語』諸本の中で、どの伝本の巴伝承が一番「縁起」の前半部分に近いであろうか、以下に諸本の当該箇所との比較検討を試みてみたい。なお対象[12]とする伝本は、読み本系の「延慶本」、「長門本」、「源平盛衰記」、「四部合戦状本」、「源平闘諍録」、「南都本」、語り本系の「覚一本」、「旧林泉文庫蔵本」、「百二十句本」、「平松家本」、「鎌倉本」、「両足院本」、「小城鍋島文庫本」、「八坂本」の計十四本、その他参考までに謡曲の「巴」、「現在巴」をも対象とする。（なお以下、諸本を延、長、盛、四、闘、南、覚、林、百、平、鎌、両、小、八、巴、現、と略称する。）また比較の対象とする要素は、1巴と併称される女武者の名前、2巴の年齢、3巴が木曽義仲との離別の際に与えられた役割、4巴が討ち取った武者の名前、5巴と畠山重忠との対戦、6朝比奈三郎義秀の父母の名前、の計六点とする（なお番号は、前章での「縁起」の要約の番号に合わせてある）。

まず**1の巴と併称される女武者**であるが、「縁起」と同様に「葵」とするのは盛のみである。なお「縁起」では葵については何も語らないが、盛では葵は砺波山の合戦で戦死したとする。その他、覚、林、百、平、鎌、両、小、八は「山吹（款冬）」とし、その消息を病によって都に留まったとする。延、長、四、闘、南、巴、現では巴と併称される女武者は登場しない。

2の巴の年齢であるが、「縁起」と同様に十八歳とするものは見あたらない。最も近いのは百、小、八の「二十二・三歳」で、その他延が「三十計」、長が「三十二歳」、盛が「二十八歳」、四が「三十一歳」、闘が「三十歳」、南、覚、林、平、鎌、両、巴、現では巴の年齢について言及しない。

3の巴が木曽義仲との離別の際に与えられた役割については、「縁起」では「国へ下りつつひそかに申しとどけよ。」と巴は木曽への情報伝達を託される。それとほぼ同様なのが盛の「国へ下、此有様を人々に語れ」。巴では「守、小袖を木曽に届けよ。」と木曽へ形見を届けることを依頼され、百、小、八では「義仲が後世をもとぶらいなんや。」、「義仲が後世、とぶらうて得させよ。」と義仲の供養を依頼される。また現では「形を持ちて故郷へ帰り、様かへ跡弔ひもうすべし。」と木曽への形見の運搬と供養とを依頼される。その他、覚、林、平、鎌、両では離別の際巴はただ落ち延びるだけで義仲より何も役割を負わされていない。また延、長、四、闘、南では巴はいつのまにか行方不明となったとされ義仲との離別自体が語られない。

4の巴が討ち取った武者の名であるが、「縁起」では義仲との離別の後「おんたの八郎師重」を討ち取ったとする。覚、林、百、平、鎌、両、小、現では「御（恩）田八郎師重」、八では「恩田八郎為重」を義仲より離別を告げられた後討ち取って落ち延びたとする。また盛は義仲との離別以前に「内田三郎左衛門」を、闘では行方不明になる前に「恩田八郎宗春」を討ち取ったとする。その他、延、長、四、南、巴では巴は名のある武者を討ち取ることはない。

5の巴と畠山重忠との対戦であるが、「縁起」では巴は戦場を離脱した後重忠と対戦し生け捕られている。『平家物語』諸

本の中で巴と重忠との対戦を語るのは盛のみである。盛では巴は義仲との離別の後ではなく河原合戦の際に重忠と対戦する。なお注目すべき点は重忠は巴を「木曽ノ妾トイヘハ懐キソ重忠今日ノ得分ニ巴ニ組ンテ虜ニセン」と生け捕りにしようとして「弓手ノ鎧ノ袖ニ取付」くが、巴は「冑ノ袖フッツト引切」って何とか逃げ延びている点で、重忠が巴を生け捕る「縁起」に通底するといえるであろう。

6の朝比奈三郎義秀の父母に関しては、「縁起」では重忠に東国へ伴われ三浦大介義明に参らせられた巴が三浦大介義明との間に義秀を儲けた（但し実の父は畠山重忠）とする。これと近いのが盛、闘で、戦場を離脱した巴の後日談として東国に下り三浦大介の孫の和田義盛との間に義秀を儲けたとする。その他、延、長、四、南、覚、林、百、平、鎌、両、小、八、巴、現には巴が東国へ下り義秀を生んだとする記述はない。

さて以上のことをまとめたのが次ページの表「「縁起」と『平家物語』諸本との比較」である。このようにしてみると1から6の要素のうち1、3、5、6において盛と「縁起」とが類似しており、両者が通底していることがわかるであろう。また2の巴の年齢についても盛と「縁起」とは下一桁が「八」で共通しており、両者の間に何らかの関係があることをそこに見ることも強ちに無理ではないように思われる。[13]もちろん4の巴が討ち取った武者の名のみならず、話の展開が「縁起」では3から6へと番号順に展開していくのに対し盛では5、4、3、6と展開し（なお1と2は巴の紹介であるので比較の対象から除外する。）、決定的に異なっているので「縁起」が直接に盛の影響を受けて成立した（つまり「縁起」の作者が盛を直接見て「縁起」を構想した）ということはないであろうが、大きく見て「縁起」は盛が伝えるようなものに近い巴に関する伝承を背景に成り立っていると言うことがいえるであろう。

和田義盛と畠山重忠とは、頼朝政権の代表的な御家人として広く中世文芸の中で並び称される存在であったことは言うまでもないことであろう。またその子息である朝比奈義秀と畠山重保についても強力無双にして、一族滅亡に際してそれぞれ門破り、人礫[14]等の超人的で華々しい活躍をしたという伝承を持つなど似た類型を持った若武者であり、和田氏[15]と畠山氏とは父子二代にわたって対照されるというイメージがある。ところが問題なのは、畠山氏の場合は重忠・重保二代にわたって強力が継承されているのに対して、和田父子の場合は子の義秀は強力で有名なのに対し父の義盛は『平家物語』諸本の「遠矢」の章段等に描かれているように強力そのものというよりは弓矢の技量によって有名である上に、号も和田から朝比奈へと変わるなど父子の間にイメージの断絶があるのである。こうしたイメージの断絶がそもそも朝比奈義秀の強力の由来を語る必然性を生じさせ、朝比奈義秀の母を巴とする伝承を生む一因ともなっているのであろうが、「縁起」ではそうした父子間のイメージの断絶に着目して、朝比奈義秀の強力を母方からだけではなく、盛が伝えるようなものに近い巴に関する伝承を背景にして、父方からも説明を付ける形で、巴を実際に重忠に生け捕らせて朝比奈義秀を重忠の子として組み込んだのであろう。なおその際、畠山重忠が巴を参らせる相手としては重忠と並び称される和田義

	縁起	延	長	盛	四	闘	南	覚	林	百	平	鎌	小	両	八	巴	現
1	葵			葵				山吹	款冬	款冬	款冬	款冬	款冬	款冬	款冬		
2	十八	三十計	三十二	二十八	三十一	三十				二十二・三			二十二・三		二十二・三		
3	国へ下りつつひそかに申しとどけよ。	（行方不明）	（行方不明）	国へ下、此有様を人々へ語れ。	（行方不明）	（行方不明）	（行方不明）			義仲が後世をもとぶらひなんや。			義仲が後世をもとぶらひなんや。		義仲が後世、とぶらうて得させよ。	守、小袖を木曽へ届けよ。	形を持ちて故郷へ帰り様かへ跡弔ひ申すべし。
4	おんたの八郎師重			内田三郎左衛門		恩田七郎宗春		御田八郎師重	おん田八郎師重	恩田八郎師重	御田八郎師重	御田八郎師重	御田八郎師重	恩田八郎師重	恩田八郎師重		恩田八郎師重
5	義仲との離別の後			河原合戦													
6	ともへ三浦大助（畠山重忠）			巴和田義盛		巴和田義盛											

盛よりも二[16]人にとって祖父に当たる三浦大介義明の方が相応しいのでそのように改変したものであろう。かくして本来和田氏滅亡に関わる朝比奈義秀の高麗渡航伝承は畠山氏滅亡を物語る御伽草子『はたけ山』の中に取り込まれ「朝比奈宮の縁起」として成立したのである。

四、終わりに

さて以上、「朝比奈宮の縁起」が『源平盛衰記』に見られるようなものに近い巴に関する伝承を基にして、畠山氏滅亡の物語『はたけ山』に取り込まれて成立したであろうことを考察してきた。

なお、御伽草子『はたけ山』の成立年代に関しては、従来室町時代末期とされてきた。その作品内に含まれる畠山重保による人磔伝承や竜宮への逃避行といった由比ヶ浜での戦いにまつわる伝承が中世期に広く流布したものであったことは、既に徳[17]田和夫氏が論証されており、また近世期にはどちらかといえば廃れていく傾向にあったということが前提としてある以上、私もその説に対して特に異論があるわけではない。但し、私が確認しうる限り朝比奈義秀の高麗渡航伝承を記した最古の文献は林羅山の『本朝神社考』（寛永十五（一六三八）年～正保二（一六四五）年頃に成立カ）であり、また『源平盛衰記』の最初の刊行は慶長年間でありその伝承世界が広く巷間に流布したのはそれ以後のことであろう。もちろん朝比奈義秀の高麗渡航伝承の生成・流布が『本朝神社考』を遡れないということでもないであろうし、慶長古活字版の刊行以前に『源平盛衰記』に含まれるような伝承が全く流布していなっかたということでもないであろうが、ただ両者を一つの目安とし、また現存する『はたけ山』の伝本がいずれも江戸時代中期を遡れないものであろう点をも考え合わせるならば、『はたけ山』に「朝比奈宮の縁起」が挿入され現存する伝本のような形態になったのは、或いは近世初期以降のことになるのではないだろうか。

注

（1）『源平盛衰記』巻三十五「巴関東へ下向ノ事」、『源平闘諍録』巻八之上「木曽於瀬田被討事」等によれば、元暦元（一一八四）年の義仲敗死の後巴は関東へ下向し、和田義盛との間に朝比奈義秀を生んだとする。なお『吾妻鏡』によれば、建保元（一二一三）年の和田合戦当時義秀は三八歳であり、元暦元年には既に生まれていたことになり、朝比奈義秀の母を巴とする説が事実として受け入れがたいものである事は言うまでもないであろう。なおそうした年齢に関する矛盾を解消するためであろうか『本朝神社考』では和田合戦当時の朝比奈義秀の年齢を二十八とするほか、『廣益俗説弁』には「…ある人共の説に、古本東鑑には、義秀が年齢を二十八と記せりといへり、…」という記述がある。

（2）「門破り」に関しては、『吾妻鏡』建保元年五月二日条に、「…賊徒遂圍幕府四面。…而朝夷名三郎義秀敗惣門、乱入南庭、…」とある他、『看聞日記』永享十年六月十日条の絵巻に関する記事、同応永三十年七月十五日条の風流に関する記事等に見られる。「地獄破り」に関しては、狂言「朝比奈」、近世初期の絵巻物『朝比奈物語』等、また、「草摺引き」に関しては、仮名本『曽我物語』、幸若舞曲「和田酒盛」等に見られる。

（3）増補国史大系所収のものによる。

（4）なお同書では同年五月六日条の「建暦三年五月二日三日合戦被討人々日記」に「朝夷名三郎」と記すが、志田義秀氏「朝比奈の伝説

及び文学」（『日本の伝説と童話』一九四一年十一月　大東出版社）は、合戦中最も奮戦した武将であるにもかかわらず安房への逃亡が伝えられるのみで討死の模様が語られていない点、また後に承久の乱に官軍に属した和田朝盛（和田義盛の嫡孫）の名も同条に見える点などから朝比奈義秀を死籍に入れたのは誤謬であろうとしている。

（5）朝比奈義秀が木曽へ至ったとする伝承は『雲茫雑誌』等、熊野へ至ったとするのは熊野太地の『和田系図』等、讃岐へ至ったとするのは『全讃志』等に見られる。

（6）朝比奈義秀の高麗渡航伝承は『本朝神社考』の他、『続本朝通鑑』、『大日本史』、『和漢三才図絵』、『鎌倉繁栄廣記』、『鋸屑譚』等多くの文献に記されている。

（7）日本庶民生活資料集成（三一書房）所収のものによる。

（8）同伝承に関しては、志田義秀氏前掲論文の他、近藤喜博氏「朝夷名社について」（『海外神社の史的研究』　一九四三年十一月　明世堂書店、一九九六年九月　大空社より再刊）、呼子丈太朗氏「朝夷名伝説と恵比須浜」（『倭寇史考』　一九七一年二月　新人物往来社）等の先行論究がある。また私もそうした先行論究をふまえて軍記・語り物研究会第三一七回例会、伝承文学研究会第二八一回東京例会にて発表させていただいた。近いうちに論考化するつもりである。

（9）『幸若舞曲研究（二）』資料編所収の「内閣文庫蔵『はたけ山』」の解説による。なお使用したテキストも基本的には上記のものである。

（10）岩波日本古典文学大事典（項目執筆・徳田和夫氏）による。

（11）以下に両伝本の書誌を簡単に記す。

内閣文庫蔵本　所蔵、内閣文庫。函架番号、二〇四―一二五。形態、袋綴　一冊。時代、〔江戸時代中期〕写。寸法、縦二七・四糎　横一九・八糎。表紙、後補灰色無地表紙。外題、表紙左上に「はたけ山」と墨書。内題、一丁表左上に「畠山六郎しけ体」と墨書。料紙、楮紙。行数、半丁十一行（一行二十五字内外）。墨付丁数、二十丁。奥書、無し。印記、一丁表に「書籍館□」「浅草文庫」「和学講談書」「日本政府図書」の朱印。その他、表紙に内閣文庫の蔵書表三枚貼付。

神宮文庫蔵本　所蔵、神宮文庫。函架番号、第六門―四一八。形態、袋綴　一冊。時代、〔江戸時代中期〕写。寸法、縦二六・〇糎　横二四・九糎。表紙、後補肌色表紙。外題、表紙左上に「畠山六郎全」と墨書。内題、一丁表左上に「畠山しけ体　全」と墨書。遊紙、前後に一枚ずつ。料紙、楮紙。行数、半丁十二行。墨付丁数、十九丁。奥書、無し。印記、二丁表右端に二種の「林崎文庫」の朱印十九丁表左下に「天明四年申辰八月吉旦奉納　皇太神宮林崎文庫以期不朽　京都勤思堂村井古巌敬義拝」の朱印。その他、表紙に神宮文庫の蔵書表二枚貼付。

なお両伝本の本文の先後関係は未詳であるが、料紙等を比較するにやや内閣文庫蔵本の方が古いように思われる。

（12）使用したテキストは以下の通りである。延＝『延慶本平家物語本文篇』（勉誠社）、長＝『長門本平家物語の総合研究校注篇』（勉誠社）、盛＝国民文庫、四＝『四部合戦状平家物語（影印版）』（大安）、闘＝『源平闘諍録と研究』（未刊国文資料刊行会）、南＝古典研究会叢書（影印版、汲古書院）、覚＝岩波新日本古典文学大系、林＝『平家物語全注釈』（角川書店）、百＝新潮日本古典集成、平＝『平松家本平家物語の研究』（汲古書院）、鎌＝古典研究会叢書（影印版、汲古書院）、両＝『両足院本平家物語（影印版）』（臨川書店）、小＝『小城鍋島文庫本平家物語（影印版）』（汲古書院）、八＝国民文庫、巴・現＝（共に）『謡曲二百五十番集』赤尾照文堂。なお「屋代本」は当該箇所欠巻。

（13）盛の伝本のうち蓬左文庫蔵本、慶長古活字版、延宝八年絵入整版本、元禄十四年絵入整版本の当該箇所の本文を比較検討してみたが、4の巴が討ち取った武者の名を含め大きな相違はみられなかった。なお、巴が討ち取った武者の名に関しては、『平家物語』諸本中、「恩（御）田八郎師重」とするものが圧倒的に多く、盛的な巴伝承が巷間に流布しそれをもとに「縁起」が作成されていく中で、「内田三郎左衛門」から入れ替り易かったであろうことは、想像に難くない。

（14）畠山重保の人礫伝承は、『はたけ山』の他、御伽草子『頼朝之最期』や『看聞日記』応永二六年七月十五日条並びに同二九年七月十

五日条の風流の記事等に見られる。

(15) 例えば仮名本『曾我物語』巻十の「富士野の狩場への事」には、勢揃いした御家人を紹介するのに「……まつ武蔵国には、畠山庄司次郎重忠、三浦和田左衛門義盛、……若侍には、畠山二郎重保、梶原源太左衛門景季、朝比奈三郎義秀……」(岩波日本古典文学大系による)とあり和田義盛と畠山重忠とが、あるいは朝比奈義秀と畠山重保とが、それぞれ代表的な武将、若侍として知覚されていたことが知れる。

(16) 和田義盛は三浦大介義明の嫡孫であり、畠山重忠の母は三浦大介義明の娘であった。なお史実としては三浦大介義明は、治承四(一一八四)年に相模国の衣笠城で戦死しており、朝比奈義秀の父とするには無理がある。またそもそも畠山重忠と朝比奈義秀との年齢差は僅かに十二歳であり(『東鑑』によれば元久二(一二〇五)年の滅亡時点の畠山重忠の年齢は四二歳であった。)、両者を親子とする設定も現実的には無理がある。

(17) 徳田和夫氏「畠山氏の物語と奈良絵本「いしもち」」(『国語国文論集』一〇 一九八一年三月、『お伽草子研究』一九八八年十二月三弥井書店に加筆再録)による。

*なお「あさいな」の漢字表記に関しては、「朝比奈」「朝夷名」等があり、『東鑑』の表記等から鑑みるに「朝夷名」とする方がより古いものであるようだが、当論考では、便宜上、引用箇所を除いて「朝比奈」に統一した。

〔追記〕

小稿は、軍記・語り物研究会第三一七回例会(平成十年十二月十三日於法政大学)並びに伝承文学研究会第二八一回東京例会(平成十一年一月三〇日 於学習院大学)での口頭発表の一部をもとにまとめたものである。貴重な御教示を賜りました方々に深謝申し上げます。

(とくたけ よしあき)